

# 新潟県内における幼稚園の教育目標(1)

中野啓明

Educational Goals  
of Kindergartens in Niigata Prefecture (Part 1)  
by  
Hiroaki Nakano

## I 幼稚園の教育目標に関する研究の現状

教育職員免許法が改正され、ついで教育職員免許法施行規則も改正された。この改正に伴って、「教育の本質及び目標に関する科目」が教職に関する専門教育科目として誕生した。

このことは、教育法規上、教員養成課程を有する各大学の教育課程の中に教育目標に関する科目が位置づけられることを意味している。とするならば、この科目は、教育目標に関する研究の進展に伴って生まれてきたのだと思われるかもしれない。

しかし、私の知る限り、教育目標に関する研究は、大学等の研究機関ではほとんど行われていないようである。特に以下のような問題点が解明されないままとなっている。

- (A) 目的と目標との相違点や関係を理論的・実践的にどう解決するか。
- (B) end, aim, object, goal, purpose等の教育目標に関わる英語を、どのように訳し、どのように使い分け、どのように位置づけるのか。
- (C) 「ねらい」と「めあて」に関する理論をどのようにつくるか。
- (D) 教育目標と教育実践との関係は、どうあればよいのか。
- (E) 学校の教育目標の設定と評価を実際にどのように行い、どのように理論化すればいいのか。

以上の五つは、今後の教育目標論を構築していく際に必要であると考えている事柄でもある。ところで、これらの五つの事柄の内、(E)に関する貴重な先行研究がある。

中川幸次が著した『学校の教育目標—設定から評価への構想と実際—』<sup>(1)</sup>である。

中川は、この著書の目的を次のようにいう。

「私は、学校の教育目標が日常の教育活動に生かされるための具体的な手だてに着目してみました。目標の設定、具体化、実施及び評価のサイクルを理解し、活用するための実践資料をまとめてみたわけでありませう。」<sup>(2)</sup>

この中川の意図は、その章構成からも伺い知ることができる。<sup>(3)</sup>

ところで、中川は、この著書の第7章「戦後における学校の教育目標の推移」の中で、各学校の教育目標の実例に基づいて、設定（改訂）の推移、表現内容と表現型の推移、幼稚園・小学校・中学校・高等学校の教育目標の関連等について調査研究を行っている。

私は、この調査研究の成果を特に評価したい。というのも、各学校における実際の教育目標そのものを対象にするという具体的なレベルでの調査研究は、ほとんど行われてこなかったからである。

中でも、幼稚園の教育目標にまでその対象を広げていることは、注目に値する。なぜならば、従来、教育目標といえば小学校・中学校のそれが中心であり、幼稚園の教育目標の実際を伺い知ることはほとんど不可能であったからである。

この幼稚園の教育目標についての調査研究の結果を、中川は表にまとめているので、表1において示す（表1参照）。

表1 校種別教育目標の表現内容

順位	幼稚園		小学校		中学校		高等学校	
	表現内容	設定率%	表現内容	設定率%	表現内容	設定率%	表現内容	設定率%
1	友達と仲よく	74.9	よく考え・工夫	42.9	自主性	25.9	自主性	54.8
2	健康・じょうぶ	52.9	健康（心身・安全）	34.6	実践力・行動力	24.1	基礎学力の充実	49.5
3	明るく	49.0	やりぬく	32.3	健康（心身・安全）	23.1	心身の健康	45.2
4	よく考えて	39.2	協力・連帯	25.6	やりぬく	19.4	体力	38.7
5	創造性・工夫	39.2	たくましい	25.2	協力・連帯	18.5	創造性（力）	32.3
6	元気よく	37.2	明朗	24.8	心豊か・情操	17.6	責任感	24.7
7	かんばり・やりぬく	31.3	進んで学ぶ・学力充実	17.7	進んで学ぶ・学力充実	15.7	自律的	22.5
8	自主性	13.7	実践力・行動力	13.2	よく考え・工夫	14.8	気力	22.5
9	じょうずに聞き・話す	13.7	思いやり	12.0	積極的・意欲的	14.8	豊かな情操	22.5
10	基本的な生活習慣	13.7	自主性	12.0	創造性	12.0	実践（行）力	20.4
他	きまりを守る、豊かな心、思いやり、たくましさ		心ゆたか、情操、ねばり強い、創造性、かっこいい、知性		たくましい、かっこいい、知性、判断力、明朗		豊かな人間性、勤労、積極性、真理の探求、明朗	

(54年度 公立幼稚園 51園調査) (54年度 中越教育事務所管内、小学校266校 中学校108校調査) (55年度 県立高等学校 93校調査)

出典) 中川幸治『学校の教育目標－設定から評価への構想と実際－』（栄町立栄中学校発刊事務局、1990年）、142ページ。

中川は、幼稚園の教育目標に関する記述の中から14の表現内容を取り出し、この表現内容をもとに分析し10位までの設定率を示しているのである。

しかしながら、中川の幼稚園の教育目標に関する調査研究には、以下の問題点がある。

- (a) 調査対象が公立幼稚園に限定されており、私立幼稚園が含まれていない。
- (b) 小学校、中学校に関しては教育目標の表現型が示されているが、幼稚園に関しては示されていない。
- (c) 小学校、中学校に関しては教育目標の設定（改訂）の時期が示されているが、幼稚園に関

しては示されていない。

(d) 現行の教育目標の継続期間の見通しについての調査が行われていない。

(e) 教育目標の評価を行っているのか、いないのか、もし行っているとしたら、誰が、いつ行っているのかについての調査が行われていない。

(f) 教育目標と重点目標、努力事項等の相関関係が示されていない。

以上の六つの問題点は、今後、幼稚園の教育目標に関する調査を実施する際には、解明しなければならない項目でもある。しかしながら、中川の研究成果のみを資料として、これらの点を解明することはできない。

そこで、私は、中川の研究における以上の問題点を克服することをめざし、調査を実施した。本稿においては、上記の問題点の内の(a)～(e)に関する調査結果と考察を示す。

## II 方 法

### 1. 質 問 紙

新潟県内における各幼稚園の教育目標の具体的内実を把握するための枠組みとして、以下の事柄に関する項目を設定した。

- ① 現行の教育目標
- ② 現行の教育目標の設定の時期
- ③ 現行の教育目標の継続期間の見通し
- ④ 教育目標の評価の有無
- ⑤ 教育目標を評価する時期
- ⑥ 教育目標を評価する主体

なお、①と⑤に関しては自由記述式とし、②～④及び⑥に関しては選択肢を設けた。ただし、⑤に関しては具体的な月を記入してもらった。

### 2. 調査の実施

新潟県内の全幼稚園169園を対象に、調査用紙を郵送する方式で行った。

調査時期は、平成4年10月23日～11月20日である。

有効回収数は82園（内、公立幼稚園38園、私立幼稚園44園）であり、回収率は48.5%であった。

## III 調査結果と考察

### 1. 教育目標の表現型

自由記述式で記入してもらった各幼稚園の教育目標を、中川の示している分類型を参考にして、六つに分類した。すなわち、「1項目型」、「2項目型」、「3項目型」、「4項目型」、「5項目以上型」、「主文+副文型」である。

この内の「主文+副文型」とは、まず主文があり、次に複数の副文があるという、主文と副文の複合型のことである。

回答のあった82園中における各型の設定率を示す（図1-1参照）。

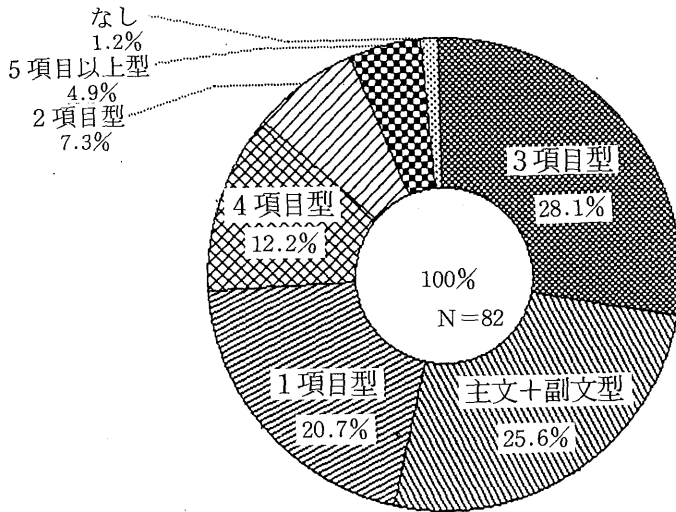


図1-1 表現型

回答のあった82園中の表現型では、「3項目型」が28.1%と最も多く、次いで「主文+副文型」が25.6%、「1項目型」が20.7%である。一方、「4項目型」は12.2%、「2項目型」は7.3%、「5項目以上型」は4.9%である。

したがって、新潟県内における幼稚園の教育目標の表現型の特徴としては、「3項目型」「主文+副文型」「1項目型」の三つで全体の70%を超える率を占めているということが挙げられる。ところで、「主文+副文型」は、さらに分析すると、次の4つに分類することができる。

- ・ 主文一つに対して副文二つの型（以下「1+2型」とする）
- ・ 主文一つに対して副文三つの型（以下「1+3型」とする）
- ・ 主文一つに対して副文四つの型（以下「1+4型」とする）
- ・ 主文二つに対して副文が三つづつの型（以下「2+3型」とする）

「主文+副文型」を1とした場合の、「1+2型」「1+3型」「1+4型」「2+3型」四つの設定率を、図1-2において示す（図1-2参照）。

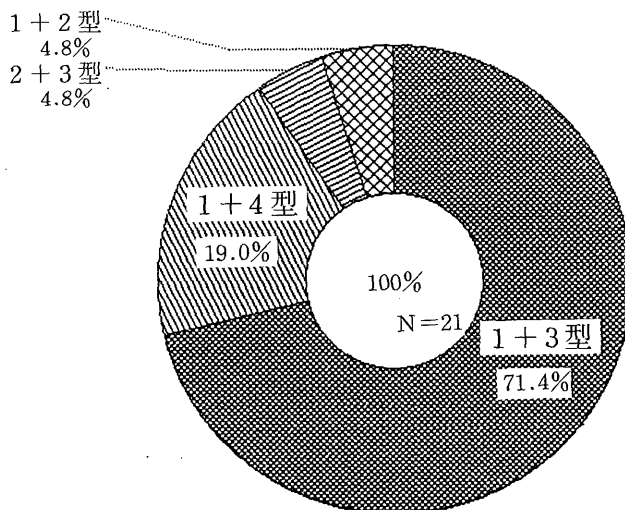


図1-2 主文+副文型中の分類

これら四つの内、最も設定率の高いのは「1+3型」である。

この「1+3型」は、「主文+副文型」の71.4%（回答のあった全82園中の18.3%）を占めている。一方、「1+4型」は「主文+副文型」の19%（回答のあった全82園中の4.9%）、「1+2型」「2+3型」は共に「主文+副文型」の4.8%（回答のあった全82園中の1.2%）である。

したがって、「主文+副文型」の中では「1+3型」の設定率が高いということがいえる。

この設定率の高さは、「1+3型」が単独でも「4項目型」の設定率以上の割合を占めているということからもいえる。すなわち、82園中の「1+3型」の設定率18.3%は、図1-1に示した「4項目型」の設定率12.2%よりも高い。つまり、「1+3型」は単独でも「4項目型」の設定率以上の割合を占めているのである。

## 2. 表現内容

自由記述式で記入してもらった各幼稚園の教育目標を、中川の示している表現内容を参考にし、18に分類した。すなわち、「仲よく」「健康・丈夫・健やか」「明るく」「考え」「創造・工夫」「元気」「がんばり・やりぬく」「自主・進んで」「話し・聞く・いえる」「生活習慣」「豊かな心」「思いやり」「たくましい」「表現」「やさしい」「のびのび」「素直」「強い」である。ただし、分析にあたっては、実際の記述が“仲良く”であっても“仲よく”であっても“なかよく”であっても「仲よく」に含めるというように、それぞれのキーワードの表現の仕方が漢字であっても平仮名であっても一括して示した。

回答のあった82園における各型の設定率を示す（図2参照）。

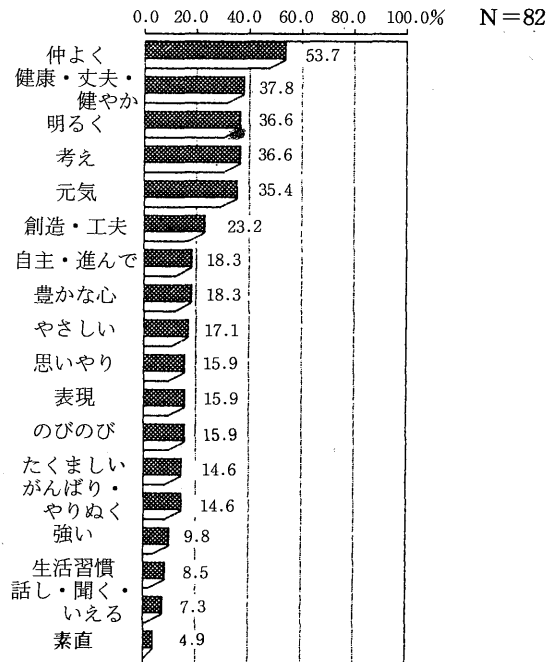


図2 表現内容

回答のあった82園中、最も設定率の高い表現内容は「仲よく」の53.7%である。次いで「健康・丈夫・健やか」が37.8%、「明るく」「考え」が共に36.6%、「元気」が35.4%である。また、

「創造・工夫」が23.2%、「自主・進んで」「豊かな心」が共に18.3%、「やさしい」が17.1%、「思いやり」「表現」「のびのび」がそれぞれ15.9%と続く。これらが10位以内の表現内容である。

以上のことからすれば、新潟県内における幼稚園の教育目標の表現内容の特徴としては次のことがいえる。

- (ア) 各幼稚園が最も多く使用している表現内容は「仲よく」であり、約半数の幼稚園が使用している。
- (イ) 「仲よく」「健康・丈夫・健やか」「明るく」「考え」「元気」という上位五つの表現内容は、全て35%を超える設定率を示しており、3分の1以上の幼稚園が使用している。
- (ウ) 2位の「健康・丈夫・健やか」から5位の「元気」まで、及び7位の「自主・進んで」から13位の「たくましい」までの差は5%に満たない。したがって、全般的傾向としては、特定の表現内容のみを使用しているのではなく、複数の表現内容の中から選び出し、相対的に使用していることが挙げられる。ただし、1位の「仲よく」に関しては、その限りではなく、2位の「健康・丈夫・健やか」よりも20%近く高い。

次に、表1に示した中川の調査研究の結果をもとに、13年前の表現内容の順位との比較を行いたい。ただし、中川は公立幼稚園のみを調査対象としているので、この点は考慮しなければならない。しかしながら、これ以外に新潟県内の幼稚園を対象とした資料がないので、これをそのまま用いることにする。中川の調査結果と今回の調査結果との順位の比較を表2において示す(表2参照)。

表2 昭和54年度との比較

昭和54年度調査			平成4年度調査		
順位	表現内容	設定率%	順位	表現内容	設定率%
1	友達と仲よく	74.9	1	仲よく	53.7
2	健康・じょうぶ	52.9	2	健康・丈夫・健やか	37.8
3	明るく	49.0	3	明るく	36.6
4	よく考えて	39.2	3	考え	36.6
4	創造性・工夫	39.2	5	元気	35.4
6	元気よく	37.2	6	創造・工夫	23.2
7	がんばり・やりぬく	31.3	7	自主・進んで	18.3
8	自主性	13.7	7	豊かな心	18.3
8	じょうずに聞き・話す	13.7	9	やさしい	17.1
8	基本的生活習慣	13.7	10	思いやり	15.9
			10	表現	15.9
			10	のびのび	15.9

註) 昭和54年度の調査結果は、以下の文献をもとに作成した。

中川幸治『学校の教育目標—設定から評価への構想と実際—』(栄町立栄中学校発刊行事務局、1990年)、142ページ。

昭和54年度の調査と平成4年度に行った今回の調査との比較を行う。すると、以下の点がわかる。

- (カ) 昭和54年度においても平成4年度においても「仲よく」が最も多い。
- (キ) 昭和54年度においても平成4年度においても「仲よく」「健康・丈夫・健やか」「明るく」「考え」「創造・工夫」「元気」「自主・進んで」という七つの表現内容が10位以内に入っている。
- (ク) 昭和54年度においても平成4年度においても上位三つは「仲よく」「健康・丈夫・健やか」「明るく」であるが、昭和54年度に比べ平成4年度においては設定率はいずれも10%以上低くなっている。
- (ケ) 平成4年度においては、「がんばり・やりぬく」「話し・聞く・いえる」「生活習慣」という表現内容が10位以内に入らず、代わって「豊かな心」「やさしい」「思いやり」「表現」「のびのび」という表現内容が10位以内に入ってきた。

以上のことからすれば、13年前においても、今日においても、新潟県内の幼稚園の教育目標の表現内容としては「仲よく」が他の表現内容よりも抜きんでて高いということがいえる。

また、「仲よく」「健康・丈夫・健やか」「明るく」「考え」「創造・工夫」「元気」「自主・進んで」という表現内容は、13年前においても、今日においても、新潟県内の幼稚園の教育目標として使用される頻度が高いということもいえる。

しかしながら、13年前と比べ、今日においては、「豊かな心」「やさしい」「思いやり」「表現」といった新しい表現内容も使用されるようになってきているといえる。

### 3. 現行の教育目標の設定の時期

「本年度」「昨年度」「2から5年前」「6から10年前」「11年以上前」「わからない」の各項目を選択した、82園中の割合を、図3において示す(図3参照)。

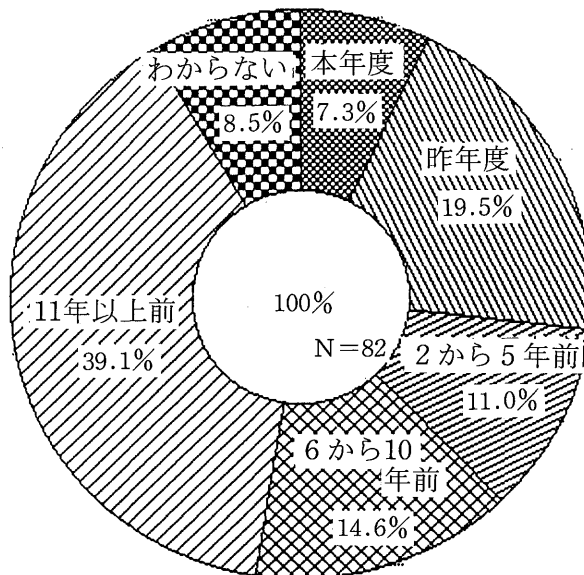


図3 設定(改訂)の時期

5年以内に教育目標を改訂もしくは設定している園は、40%前後である。

一方、「11年以上前」「わからない」の比率は、50%近い。

ところで、小学校・中学校は学習指導要領の改訂にもなって教育目標を改訂する機会が多いという。<sup>(4)</sup>

この小学校・中学校の場合と、今回の調査で明らかになった幼稚園の場合とを比較するならば、新潟県内の幼稚園においては、教育目標の改訂・設定に際して、教育要領の改訂などの影響を著しく受けているとはいきれないということの意味しているといえるであろう。

#### 4. 現行の教育目標の継続期間の見通し

「1から5年」「6から10年間」「11年間以上」「未定」「わからない」の各項目を選択した、82園中の割合を、図4において示す(図4参照)。

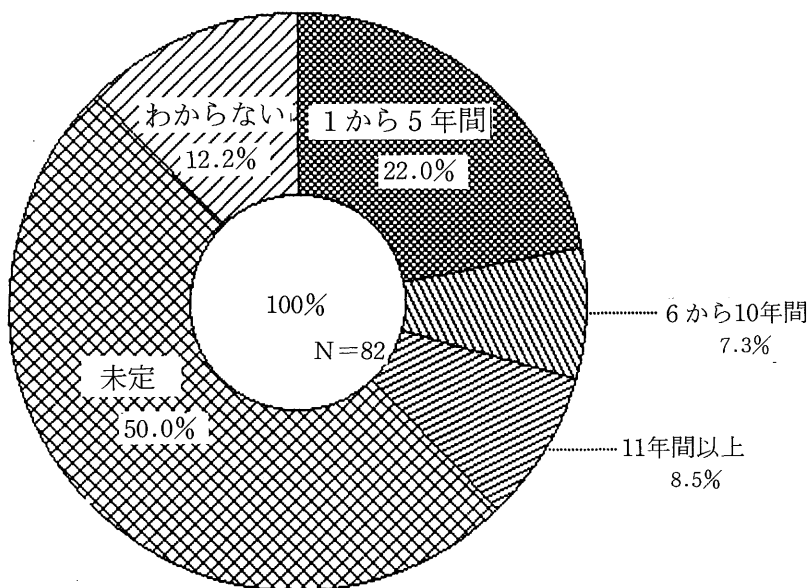


図4 継続期間の見通し

現行の教育目標の継続期間の見通しとしては「未定」が最も多く、50%前後の割合を占めている。一方、具体的な継続期間の見通しをもっている園は、10年間以内の場合では30%以内であり、11年間以上の場合を含めても40%に満たない。

このことは、新潟県内の幼稚園においては、教育目標を短期のものではなく、継続性のある長期的なものとして捉えていることを示している。

しかしながら、達成可能な教育目標を設定し、そのための計画を策定するという観点からすれば、なお検討の余地が残されているともいえよう。

#### 5. 教育目標の評価

「行っている」「決まっていない」「行っていない」の各項目を選択した、81園(内、公立幼稚園37園、私立幼稚園44園)中の割合を、図5-1において示す(図5-1参照)。



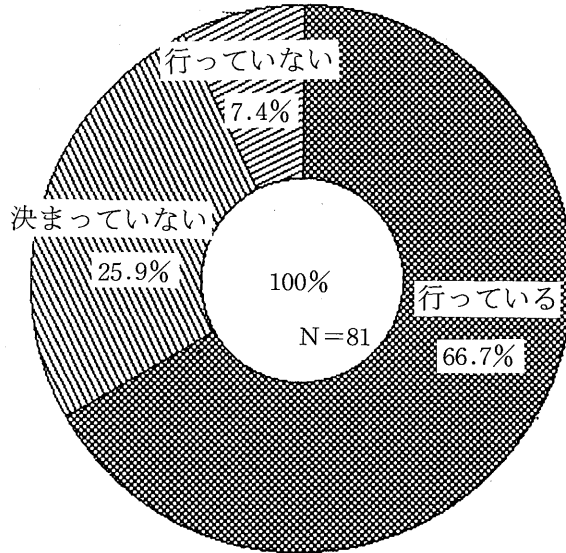


図5-1 評価の有無

教育目標の評価を「行っている」と答えた園は、66.7%であり、この「行っている」という項目を選択した園が最も多かった。

では、何月に行っているのだろうか。

回答のあった51園中の調査結果を、図5-2において示す（図5-2参照）。

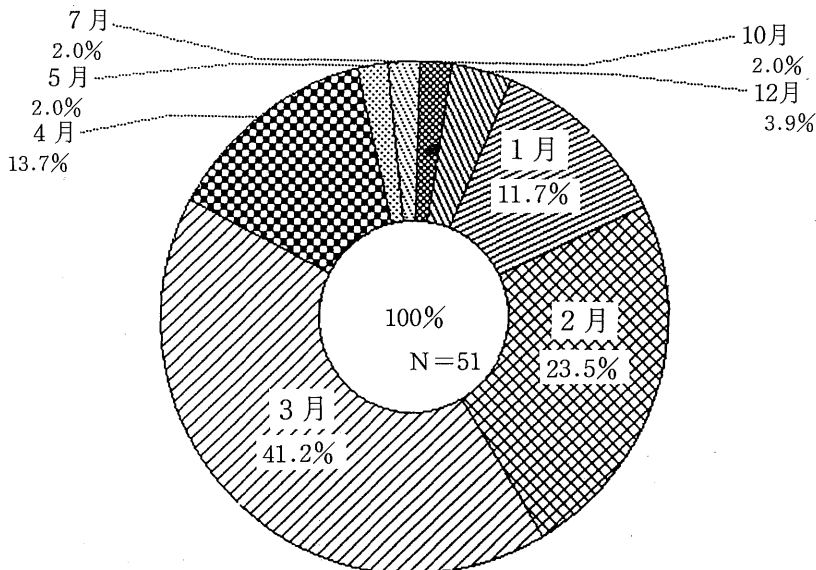


図5-2 評価の時期

月別では、年度末の3月が最も多く、回答のあった園の41.2%を占めている。

学期別にみていくなれば、10月及び12月という2学期の内に行っている園は5.9%であり、1月・2月・3月という3学期の内に行っている園は76.4%であり、4月・5月・7月という次年度の1学期に行っている園は17.7%である。

このことは、新潟県内の幼稚園においては、教育目標の評価時期が3学期、しかも学年末の3

月に集中していることを示している。

しかしながら、教育目標の達成状況を評価し、その結果としてもし教育目標を改訂することになったとして、改訂への取り組みの日程を考えるならば、3月では時間的な余裕を十分に取ることが難しいといえるのではないであろうか。この意味で、12月頃に教育目標の評価をしている園を評価したい。

教育目標の評価に関する考察の最後に、教育目標を評価する主体が誰であるのかという問題を取り上げてみたい。

「園長」「副園長・教頭」「主任」「専門の委員会」「職員全体」「その他」の各項目を選択した80園(内、公立幼稚園36園、私立幼稚園44園)中の割合を、図5-3において示す(図5-3参照)。

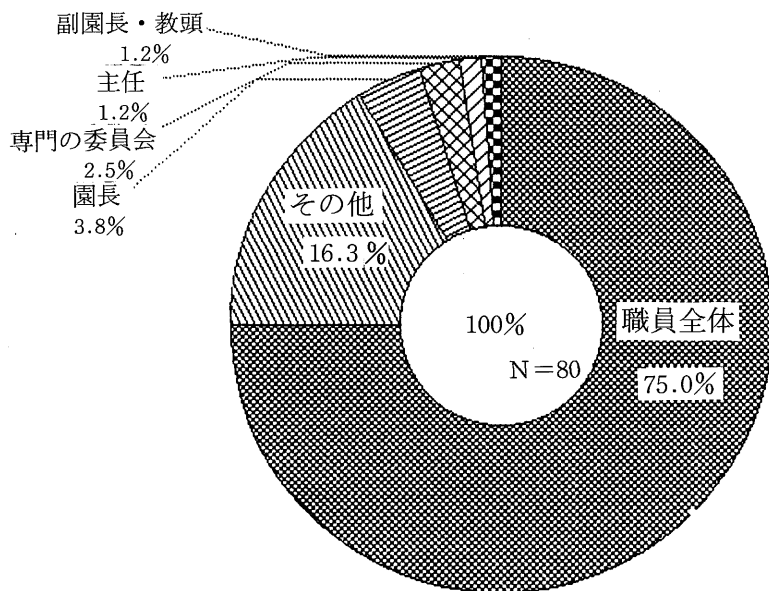


図5-3 評価の主体

教育目標の評価をする主体が「職員全体」と回答したのは、75%である。しかも、「その他」の中には、「園長と職員」「主任と職員」など職員全体が関わっている回答が11.3%含まれている。

したがって、新潟県内の幼稚園においては、9割近くの幼稚園が教育目標の評価を職員全体で行っているということがわかる。

一方、専門の委員会を設置する場合は、2.5%ときわめて少ない。これは、一つの幼稚園に勤務する職員の人数が少ないことにも起因していると思われる。

以上、平成4年度に行った調査をもとに、新潟県内の幼稚園の教育目標を表現型、表現内容、設定(改訂)の時期、継続期間の見通し、評価の観点から考察を加え、その具体的内実を解明しようと試みてきた。

しかしながら、教育目標の表現内容におけるジレンマの克服の問題<sup>(5)</sup>、教育目標と重点目標との関係、教育目標の評価の仕方については、十分に論じきれてはいない。これらの問題については、今後の課題としたい。

最後に、今回の調査に協力していただいた各幼稚園に心から感謝申し上げたい。

## 註

- (1) 中川幸次『学校の教育目標－設定から評価への構想と実際－』（栄町立栄中学校発刊事務局、1990年）。
- (2) 中川幸次、同書、160ページ。
- (3) 中川幸次、同書、目次参照。  
本書の章構成は、次の通りである。  
第1章 学校の教育目標の理解  
第2章 学校の教育目標の設定  
第3章 学校の教育目標の具体化  
第4章 学校の経営計画  
第5章 学校の教育目標の評価  
第6章 学校の教育目標の設定から評価への実際－新潟県南蒲原郡栄町立栄中学校－  
第7章 戦後における学校の教育目標の推移  
第8章 教師の教育的態度
- (4) 中川幸次、同書、125－129ページ。
- (5) この問題については、次の文献を参照のこと。  
村井実『子どもの再発見』（小学館、1982年）、第6章「教育にはどんな目標がありうるか」。  
斎藤勉「教育目的論」〔熊谷一乗編『現代の教育原理』（東信堂、1985年）〕、30－47ページ。